

同志社女子大学生生活科学 Vol. 44, 6~15 (2010)

《原著論文》

馬王堆一号漢墓出土の“直裾袍”の構成と着装について

——複製を手がかりに——

The Composition and Wearing of the “Straight-hem Gown”
Unearthed from the Han Tomb No.1 at Mawangdui

——By Making a Copy——

水野夏子
(Natsuko Mizuno)

Abstract : In this study, I will focus on the “straight-hem gown” unearthed from the Han Tomb No.1 at Mawangdui, and make clear the special features of its composition and wearing. The following conclusions were made :

1. According to contributing literary resources, the “straight-hem gown” was used for everyday clothing, but by investigating the garments found in the figures, the possibility that the “straight-hem gown” was extravagant and appropriate clothing for formal occasions can be considered.
2. The length of the edging of the hem is as long as 40 cm. I established that the edging touches above the knee and that the reason for the long hem was to make walking and formal behavior easier.
3. The possibility that there are several types of materials, patterns, sleeve shapes, lengths, collars, edgings and skirt designs in addition to those found in the unearthed gown can be considered.
4. The waist measurement was established to be 70 cm (or less than 70 cm). It can be considered that the sense of beauty during that time valuing a narrow waist was emphasized by the widening-hem structure in the figures.
5. The waist-cord can be thought to have been tied below the buttocks.

Key words : Gown, Han Tomb No.1 at Mawangdui, Composition, Wearing

はじめに

1972年に中国の湖南省長沙市で発見された馬王堆一号漢墓は、前漢初期の文帝15(B.C.165)年頃に埋葬されたとされる、長沙国丞相を務めた軼侯・利蒼¹⁾の妻の墓である。本墓からは2種類の袍が出土している。発掘報告書『長沙馬王堆一號漢墓』²⁾(以下、発掘報告書)では、裾の形状の違いから、“曲裾袍”(裾が曲折した形

のもの)と“直裾袍”(裾が直線状のもの)と呼んでいる³⁾。“曲裾袍”は11点、“直裾袍”は3点出土した。

この2種類の袍に関する先行研究には、相川氏と袁氏の研究がある⁴⁾。相川氏の研究は、袍を中心に考察したものではないが、その中で袍に関しては、バイアス使いについて言及し、布地の裁ち方(パターンの置き方)を推定して裁断図を提示している。つまり、袍の裁断方法に着目している。一方、袁氏は、袍の素材・文様・色彩・衣服形態を、文献史料と当時の文化的背景から説明しているが、その内容は発掘報告書にある解説の範囲を超えたものとは言い難い。また、いずれも袍の着装につい

大阪城南女子短期大学嘱託講師
同志社女子大学大学院生活科学研究科研究生

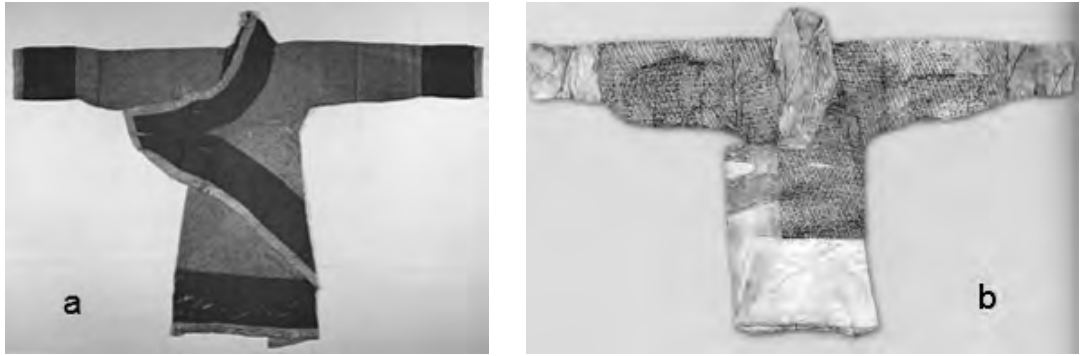


図1 袍

- a: “曲裾袍” (遺物番号 329-10「信期繡褐羅綺綿袍」)
 湖南省博物館編『湖南省博物館文物精粹』, 上海書店出版社, 2003年, p.72
 b: “直裾袍” (遺物番号 329-12「印花敷彩黃紗綿袍」)
 中国織繡服飾全集編集委員会編『中国織繡服飾全集 第3巻 歴代服飾巻 上』
 (中国美術分類全集), 天津人民美術出版社, 2004年, p.113

ては触れられていない。即ち、これまで本墓の2種類の袍の構成や着装に対して、詳細な考察は殆ど行われておらず、また服飾研究ならではの複製を用いたアプローチも見られない。

そこで、筆者はこれまでに、まず“曲裾袍”を取り上げ、出土した11点の代表例として、発掘報告書に図解と詳細な縫製説明が見られる「信期繡褐羅綺綿袍」(遺物番号 329-10) (図1-a) を1/2大で複製し、構成と着装の特徴を考察した⁵⁾。本稿では、もう一方の“直裾袍”について取り上げ、主に複製を通して、その構成と着装の特徴を明らかにしたいと思う。

複製には、発掘報告書をもとに、“直裾袍”の代表例として図解と縫製説明の見られる、遺物番号 329-12の「印花敷彩黄紗綿袍」(以下、本資料) (図1-b) を1/2

大で製作する⁶⁾。また、“直裾袍”を文献史料からも検討し、着装を知る手段である本墓の俑の着衣と、複製した袍を比較・検討する。さらに、“曲裾袍”との比較に加え、本墓の出土品を収蔵する湖南省博物館における実地調査(2006年4月)の結果を参照する。

I 発掘報告書による“直裾袍”の概要

表1は、発掘報告書から、“直裾袍”3点の素材や文様、大きさなどをまとめたものである。図2は、発掘報告書に掲載された本資料(表1-①)の図解で、前面・背面の形態図と、縫製の様子を表した分解図が示されている。また本資料の縫製説明⁷⁾は、次の通りである(以下は中国語の原文を筆者が日本語訳したものである)。

交領、右衽。上衣と下裳の2部構成で、表地と裏地

表1 “直裾袍”

	遺物番号	構造	素材			文様	大きさ (cm)		出土場所
			表地	裏地	縁飾り		着丈	衿	
①印花敷彩黄紗綿袍	329-12	綿入れ	紗(黄)	平絹	平絹紗(襟)	捺染と手描き: 植物文(表地)	130	125	西の辺箱の竹行李
②印花敷彩黄紗綿袍	329-13	綿入れ	紗(黄)	平絹	平絹	捺染と手描き: 植物文(表地)	132	114	
③印花敷彩絳紅紗綿袍	329-14	綿入れ	紗(濃い赤)	平絹	平絹	捺染と手描き: 植物文(表地)	130	118	

- ※1 発掘報告書をもとに筆者作成
 ※2 綿入れの綿は真綿
 ※3 辺箱は副葬品を納める場所

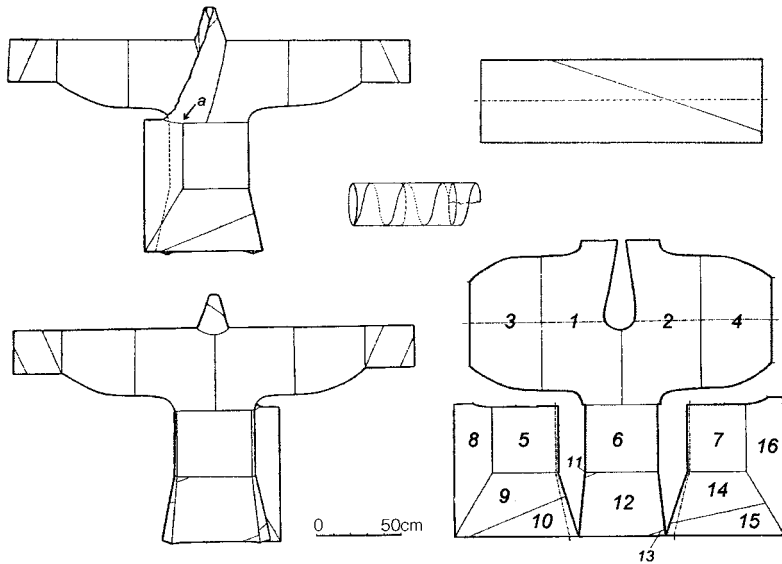


図2 発掘報告書における“直裾袍”（遺物番号 329-12）の図解（英数字は筆者記入）

は同じ裁ち方をする。上衣は、縦地に裁った身頃2枚と袖2枚の計4枚から構成され、各一幅である。4枚を缝合した後に脇下を縫う。襟元は琵琶形に刳られ、襟の縁飾りは、バイアス裁ちの計2枚で構成されている。袖の縁飾りは、半幅の紗を螺旋状に巻いて筒形にし、それを真ん中で折って裏表としているため、袖口に縫い目がない。下裳の上半分は縦地使用で、後ろ身と上前部分と下前部分が1枚ずつで各一幅を用い、丈・幅ともにほぼ同じである。下裳の下半分と上前・下前の側辺は、幅の広い縁飾りがつき、バイアス裁ちである。裾の縁飾りの丈は、下裳の上半分の丈とほぼ同寸である。後ろ身の裾の縁飾りは、等脚台形で計3枚から構成されており、中央の1枚は一幅で、両側に切れ端のような布を足している。上前・下前の裾の縁飾りは、不等辺の台形で、それぞれ半幅の布計2枚から構成されている。上前・下前の側辺の縁飾りも台形をなし、それぞれ一幅の1枚となっている。着装すると裾はラッパ状を呈する。

II “直裾袍”の複製

はじめに、図解（図2）中の分解図と、発掘報告書の袍の寸法表⁸⁾に示された本資料の各所寸法（着丈130cm、左袖口～右袖口250cm、袖付け39cm、袖丈25cm、腰幅51cm、裾幅66cm、襟の縁飾りの幅20cm、

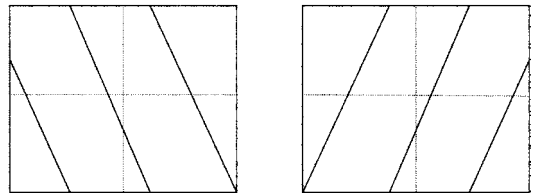


図3 袖の縁飾りの分解図（筆者作製）

袖の縁飾りの幅44cm、裾の縁飾りの丈37cm)から、1/2の大きさの型紙を作製した。その他の箇所や細部の寸法は、図解の縮尺から計算した。図解では、身頃の襟付け寸法と襟の長さが異なっており、襟を付ければギャザーができてしまう。実物の襟にギャザーは見られないが、今回は図解に従って型紙を作製した。また袖の縁飾りについて、発掘報告書では、前述のように布を螺旋状に巻いて缝合したものとして、筒状の図を示しているが、これは縫製上困難であることから、袖下に筒状にするための接ぎ目が入るようにして複製することとし、図3の型紙をおこした。

複製では、身頃（図2-1・2）、袖（図2-3・4）、下部（図2-5～7）、裾の縁飾り（図2-8～16）、襟、袖の縁飾りの6つに部位を分類し、着装した際に各部位が身体のどの位置にくるかがわかるように、色分けをして製作した。襟、袖の縁飾り、裾の縁飾りのパーツの接ぎ目は、布用染色ペンの線描きとした。各部位の布目の方向は、

馬王堆一号漢墓出土の“直裾袍”の構成と着装について

発掘報告書の縫製説明に拠るが、袖の縁飾り（図3）はバイアス裁ちとした。材料の布地には、赤（身頃）・緑（袖）・青（下部）・ピンク（襟）・青緑（袖の縁飾り）・水色（裾の縁飾り）・白（裏地）の計7色のファイユ（ポリエステル100%）を用いた。また、綿はドミット芯（厚さ約2.5mm）である。図4は完成した複製の袍で、平らに広げた状態である。

製作の工程は、次の通りである。

①身頃と袖と袖の縁飾りを、表地・裏地ごとに平面状に縫い合わせ、綿を入れる（裏表の部位のずれや綿の移動を防ぐため、表地と裏地の縫い代を同じ方向へ倒し、綿を挟んで縫い代どうしを糸で軽く留めておく。これは他の部位でも同様）。

②脇下から袖口を縫合して袖を作る。袖の縁飾りは、半分のところ（＝袖口）で折り返す。

③下部の後ろ身とその裾の縁飾り（図2-6と11～13）を縫合して綿を入れる（裾の縁飾りは、裏へ折り返って下部の裏地と繋がっている）＝〈A〉。上前の下部とその縁飾り（図2-5と8～10）も同様に、裏表を縫い合わせて綿を入れ＝〈B〉、同じく下前の下部とその縁飾り（図2-7と14～16）も縫合して綿を入れておく＝〈C〉。それから〈A〉〈B〉〈C〉を接ぎ合わせる。

④身頃と下部を接ぎ、最後に襟を綴じ付ける。

Ⅲ “直裾袍”の構成と着装の特徴

1. 文献史料に見る“直裾袍”の素材・裁断方法・着丈
“直裾袍”は当時どのような衣服であったのだろうか。“直裾袍”に関する文献史料の記述は極めて少ないため、“曲裾袍”（図5）の構成と着装に関連した記述をもとに比較・考察する（ただし原文は漢文であるが、筆者による読み下し文とする、以下同様）。

“曲裾袍”については、まず『淮南子』本経訓に「衣は隅差の削無し」とあり、その高誘注には、

隅は角なり、差は邪なり、古者は質にして、皆全幅を衣裳と為し、邪角を有つこと無し、邪角は削殺なり⁹⁾

とある。「衣は隅差の削無し」とは、当時の奢侈の世相を批判して、古の聖人は自ら布地を裁断しない衣服作り



図4 複製の袍（筆者撮影）

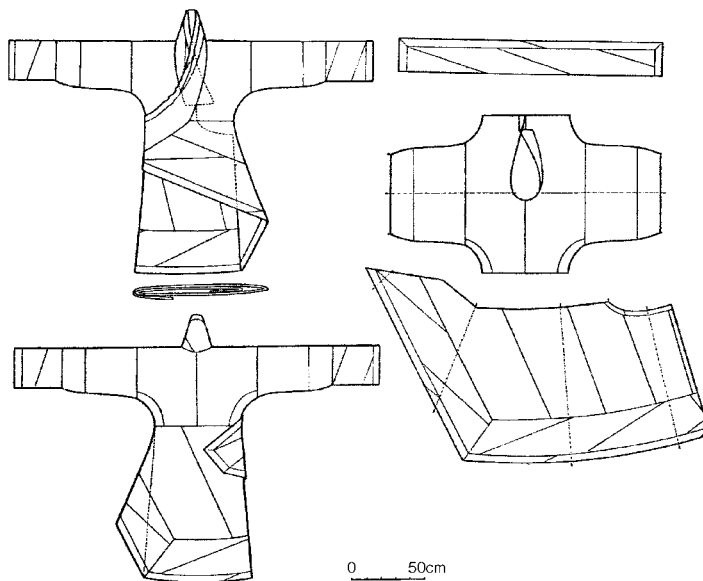


図5 発掘報告書における“曲裾袍”（遺物番号329-10）の図解

を実践することで、人民に節儉の規範を示していたことを述べたものである。高誘の注もふまえると、衣服の製作に布幅を全部使用せず、はぎれを残すことが、奢侈とされていたことが理解できる。細かい裁断と接ぎによって、「寄せ裂」風に仕立てられた“曲裾袍”（図5）は、全布幅を使わずに多くの裂を組み合わせた衣服で、バイアス裁ちも多い。また『史記』孝文本紀には、次のように述べられている。

上常に綿衣（厚繒）を衣、幸する所の慎夫人に、衣は地に曳くことを得ず、幃帳は文繒を得ざらしむ、以て敦朴を示し、天下の先と為す¹⁰⁾

ここからは、“曲裾袍”（着丈：最小130cm～最大162cm）のような裾を曳く姿が、贅沢さの表れとされていたことが読み取れる¹¹⁾。

以上の記述からすると、“直裾袍”（図2）は、“曲裾袍”に比べて全幅を使っていないパーツ、バイアス使いのパーツが少ないことから、“曲裾袍”ほど奢侈な衣服ではないことがわかる。着丈についても、後に複製の袍を着装させたモデルを示すが、“直裾袍”は裾を曳かない地面から少し上がったものであるため、“曲裾袍”より奢侈ではないといえる。

また、“直裾袍”の素材である紗に関して、『漢書』江充伝には、

自ら請願し常に被る所の服冠を以て見上す、上之を許す、充は紗縠の禪衣を衣…¹²⁾

とあり、武帝に対して江充が、日常着ている衣冠での謁見を願い出た際に、紗を使った単衣を身につけて面会したことが述べられている。ここでは単衣になっている

が、紗の素材の衣服が常服として着用されていたことがうかがえる。

2. 着装の復元に見る裾の縁飾りの役割

次に、“直裾袍”の着装を見るために、複製した袍をボディーに着せて着装を復元した（図6）。ボディーは、“曲裾袍”の着装復元（図7）の時と同じものを用いた。つまり、高さを遺体の身長（154cm）の1/2、手の長さを身長に対応した長さの1/2に設定したものである。さらに、立ち方に関しては、当時は手を胸の下で合わせ、首を少し前に出し、膝を曲げて屈むような姿勢であったことが、本墓出土の帛画¹³⁾に描かれた墓主・従者の図像と俑¹⁴⁾、また他の漢墓の俑¹⁵⁾からも明らかである。この立ち方は、漢代を通して見られるもので、「拱手」（起立し両手を前で組み合わせて挨拶する）や「揖」（軽く首を垂れて拱手し会釈する）といった拝礼に準じた姿勢であるとも考えられる¹⁶⁾。よって、ボディーも当時の立ち方に近い姿勢になるように、肩傾斜を本墓の俑とほぼ同じ角度に設定し、両手を組ませて前傾させている。

また、本資料を含め“直裾袍”の着用には腰紐が必要であるが、実物は出土していない。今回腰紐には、“曲裾袍”の着装復元に用いたもの（長さ約1.5m、白のフェイクで製作）を使用した¹⁷⁾。

着装の復元（図6）から、“直裾袍”の構成と着装の関係を見てみると、下部の縦地使いについて、“直裾袍”は“曲裾袍”（図7）のように、巻き付けることによって着用するという衣服ではないので、下部をバイアスに



図6 着装の復元（筆者撮影、横線は筆者記入）



図7 “直裾袍”の着装（筆者撮影）

して体への馴染み易さを追求する必要性はそれほどなく、そのために縦地使いになっていると思われる。しかし、それでも着装した時には体に沿う形になった。そこで、縦地による歩行への影響を考えると、約40cmという非常に丈の長い裾の縁飾りにより、支障を来さないことが判明した。この裾の縁飾りの丈は、着丈のほぼ1/3を占める縁飾りの域を超えたもので、図解（図2）からすでに印象付けられており、“直裾袍”にとって重要な部位であることが考えられた。着装させてみると、裾の縁飾りはちょうど膝上の位置から接がれていることが明らかとなった（図6の前面図に記入した横線は、膝の位置を示している）。そしてこの裾の縁飾りには、バイアス地の台形布が用いられており、さらに脇の部分にプリーツ状の構成が施されている。即ち、膝上あたりからの長い丈と、バイアスの台形布およびプリーツ状の構成によって、歩行の妨げにはならないのである。特に、直立ではない当時の立ち方には、一層必要とされる構成であったと考えられる。

3. 複製した袍と俑の着衣・着装の比較

本墓出土の俑の中には、“直裾袍”を着装した俑が12点見られる。着衣戴冠男俑（以下、戴冠男俑）2点と、着衣侍女俑（以下、侍女俑）10点である¹⁸⁾。このことから、“直裾袍”は男女ともに用いられていたことが考えられる。図8の戴冠男俑の着衣は、湖南省博物館による複製である。また発掘報告書によれば、侍女俑には手がなく、竹ひごを腕の代わりに入れて、両袖を組ませているということであるが、図9の侍女俑はそれが離れて



図8 着衣戴冠男俑（着衣は湖南省博物館の複製）
文物出版社・光復書局企業股份有限公司編
『輝煌不朽漢珍寶 湖南省長沙馬王堆西漢墓』(中国考古文物之美8), 文物出版社, 1994年, 彩色図版66

いるので、前面の様子を見ることができる。

(1) 素材と文様

発掘報告書によると、戴冠男俑と侍女俑の着衣の素材には、実物と同じ紗・平絹以外に、“直裾袍”に用いられている羅・錦も使われており、錦の場合は“直裾袍”と同じく襟や縁飾りに装飾されている¹⁹⁾。また両俑の着



図9 着衣侍女俑
陳建明編『馬王堆漢墓陳列』、
湖南省博物館, p.25

衣の文様については、彩絵の雲文、製織の菱形文、刺繡の雲気文が施されていると報告されており²⁰⁾、彩絵という手法は実物と共通しているが(表1)、その文様の要素は雲(俑)と植物(実物)で異なっている。製織の菱形文と刺繡の雲気文は、“曲裾袍”に施されているものと全く同じものである。

つまり、俑の着衣の素材と文様からは、“直裾袍”には出土したものの以外にも素材・文様に種類があることや、“曲裾袍”に使われる素材・文様が“直裾袍”にも使われる場合もあることが推察される。

羅・錦・刺繡については、文献史料で次のように述べられている。『漢書』景帝紀には、

錦繡纂組は女紅(女工)を害する者なり…女紅を害するは則ち寒の原なり²¹⁾

とあり、さらに『淮南子』主術訓には、

百姓は短褐完からずして、宮室は錦繡を衣る、人主茲の無用の功を急にすれば、百姓黎民は天下に顛頓(憔悴)す²²⁾

とある。即ち、錦と刺繡は、女工の仕事を妨げて人々の衣生活を脅かすほどに、煩雑で贅沢なものであったことが読み取れる。また『淮南子』齊俗訓には、

詭文繁繡、弱緹羅紵あれば、必ず菅屨跣躄、短褐完からざる者あり²³⁾

とあり、刺繡と羅が富や贅沢の象徴として挙げられてい

る。当時は奢侈の風潮が蔓延していたということもあるが、このように羅・錦・刺繡は、技巧を凝らした贅沢品と捉えられていた²⁴⁾。

一方、『淮南子』繆称訓には、

錦繡廟に登るは、文を貴べばなり…故に笥子(管仲)は文錦なり、醜しと雖も廟に登る、子産(公孫僑)は練染なり、美なれども尊からず²⁵⁾

と見えており、錦と刺繡は、贅沢品であったと同時に、宗廟へ上がる際に用いる最高の服飾でもあったことが理解できる。

よって、羅・錦・刺繡が使われている“曲裾袍”は、贅沢で、正式な場にふさわしい価値の高い衣服であると考えられ、またこれらが俑の“直裾袍”にも使われていることから、“直裾袍”も“曲裾袍”と同じように、贅沢で、価値の高い衣服であった可能性が考えられる。

(2) 袖

複製した袍(実物)と戴冠男俑の袖は同じ形状をしており、袂の大きさも同じくらいである(図6・8)。侍女俑(図9)では、袂が大きく膨らんだ袖になっている。袖の形に種類のあったことが考えられる。

(3) 襟・縁飾り

襟と縁飾りは、戴冠男俑・侍女俑では(1)に述べたように、錦で装飾されていることが報告されており、デザインに種類のあったことがうかがえる。

(4) 着丈

複製した袍(実物)よりも戴冠男俑・侍女俑の方が、着丈が少し長くなっている(図6・8・9)。

(5) 下部のデザイン

発掘報告書には触れられていないが、俑では、下部にあたる部分に斜めの線が確認できる。これは、湖南省博物館が複製した戴冠男俑の着衣(図8)にも再現されており、侍女俑(図9)では少しわかりにくいですが、やはり斜めの線が認められる。他の侍女俑にも確認することができる。

また湖南省博物館には、着衣が朽ちて剥落してしまった侍女俑も展示されている(図10)。この侍女俑を観察すると、白線で示すように、斜線状のデザインが残存していることがわかった。そこでこのラインを繋いでみると、図11-bのように下部にラインが入り、これを着装すれば、俑と同様の斜線が入ることになる(図11-a)。

図8の戴冠男俑では斜線が2本見られるが、いずれにしても俑における“直裾袍”の下部には、このような斜めの切り替え線が入られている。

(6) 裾の広がり

“直裾袍”の裾の縁飾りの台形布とプリーツ状の構成(図2)は、歩行に有利に働くだけでなく、着装時に膝下から裾へと広がるデザインを造るものでもある。しかし実物の着装は、俑ほど裾広がりにはなっていない(図6)。俑の場合、すでに土台である木自体に裾の広が



図10 着衣の朽ちた着衣侍女俑
(筆者撮影、於湖南省博物館、白線は筆者記入)

りが造形されており、着衣は木に貼り付けるようにして着せられているため、実物よりも裾が大きく広がっている(図8~10)。意図的に裾広がりを見せていることがうかがえる。

(7) 腰まわり

“曲裾袍”の考察においては、複製した袍と、“曲裾袍”を着装している帛画の墓主の画像および彩絵立俑²⁶⁾を比較し、腰まわり寸法を検討した。結果、“曲裾袍”を帛画の墓主の画像と同じように着装するには、腰まわりが70cm前後、彩絵立俑と同じにするには、腰まわりが50cm前後でなければならないということが明らかになった。漢代の俑には腰部の細いものが多いことから、当時は現在よりも細い腰であった可能性はあるが、それを考慮しても、70cmや50cmはあまりにも細すぎると思われた。よって、『文選』の張衡「思女賦」に、美しさの描写として「諄媠の織腰を舒べ」とあり、その李善注に「諄媠は細腰の貌なり」とあるように²⁷⁾、画像や俑は写実的なものではなく、「細い腰」という当時の美意識に沿って理想化したものであり、実物の着装の腰まわりは、画像や俑とは異なるものであると考察した²⁸⁾。

そこで、本稿でも“曲裾袍”と同様に、腰まわり寸法を検討した。まずは複製した袍を、現在の標準的なサイズである90~95cm(1/2=45~47.5cm)の腰まわりで着装させてみたところ、下部の端(図2-a)が脇までは届かなかった。体に巻き付けて着る“曲裾袍”では、腰

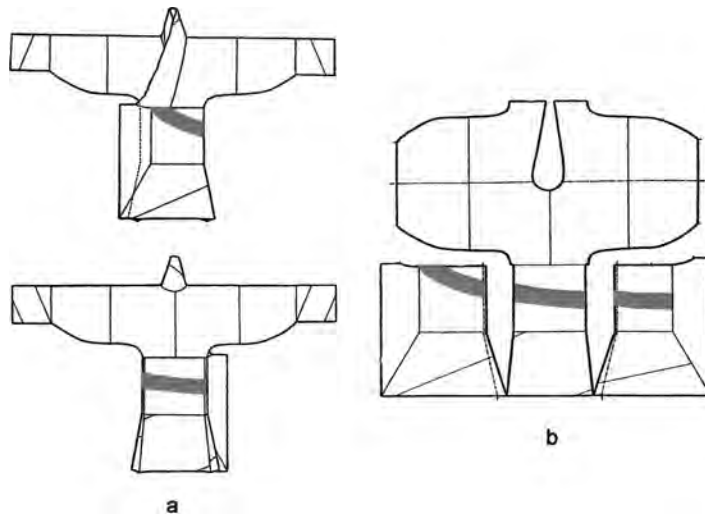


図11 下部のデザイン(ラインは筆者記入)

まわりの大きさに多少幅があっても、上前の先端の位置が変わるだけで、着装できないことはないが、“直裾袍”の場合は、下部の端(図2-a)が脇まで来ないことには、襟の位置もずれてしまい着装することができない。検討の結果、腰まわりが約70cm、またはそれ以下であれば、下部の端が脇に届き、着装が可能になることが判明した。この腰まわりの大きさで、戴冠男俑・侍女俑と同じ着装になる(図8・9)。

即ち、“直裾袍”の複製の袍による腰まわり寸法の検討からは、“曲裾袍”と“直裾袍”が同じ腰まわり(70cmもしくはそれ以下)を基準にして作られていることが明らかとなり、実際にこのような細い腰が存在した可能性を否定することはできない。そして、少なくとも本墓の画像や俑に関しては、その細く形成された腰が、理想ではなく、事実をそのまま表している可能性があると考えられる。戴冠男俑・侍女俑では、土台の木の造形と着衣の着せ方によって、裾の広がりが増強されている分、余計に腰が細く見えており(図8~10)、ここに当時の美意識が働いているのではないだろうか。

(8) 腰紐の位置

腰紐は“曲裾袍”の場合、身体に巻き付けた時に上前の先端が回ってくる臀部下で結ぶことになる(図7)。この臀部下という結び位置は、当時の立ち方に適したもので、体の前面の下腹から太腿の間に生まれるくぼんだ部分に、腰紐を固定することができ、“曲裾袍”を着装した帛画の墓主の画像と彩絵立俑も、同じ位置で結ばれている²⁹⁾。

“直裾袍”の着装では、かなり低い位置でなければ上前の端が固定できないということと、立ち方によって出来る体のラインとの関係、そして戴冠男俑・侍女俑における結び位置(縦の長さの比率で計算)から、腰紐は、“曲裾袍”と同じ臀部下で結ぶことが考えられる。図10の侍女俑では、腰紐を結んでいたと思われるラインが、臀部下の位置に残存していた。また、複製した袍をボディに着せる際には、臀部下にあたる位置で結んだ時が、最も自然で安定した着装となった。

おわりに

本稿では、馬王堆一号漢墓出土の“直裾袍”を複製し、着装の復元、文献史料、俑との比較、“曲裾袍”との比較、湖南省博物館での実地調査から、その構成と着装の特徴について考察した。

文献史料によれば、“直裾袍”が素材・裁断方法・着

丈の点では、“曲裾袍”よりも価値が低く贅沢さに欠け、または常服の役割を果たすものであったと考えられるが、俑の着衣の素材・文様との検討からは、“直裾袍”も奢侈で、儀礼にふさわしい価値の高い衣服であった可能性が示された。

“直裾袍”の裾の縁飾りの丈は、40cmにも及ぶ長いものであり、さらにその縁飾りはバイアスの台形布を用い、脇にブリーツ状の構成が施されている。これらは歩行を容易にするための工夫と見受けられる。また、複製した袍を実際に着装させることによって、膝上部分で縁飾りを接いでいることが明らかとなり、そのために丈が長くなっていることや、これが膝を曲げて身を屈める当時の立居振舞に便利であったことも判明した。

複製した袍と俑の比較からは、“直裾袍”には出土したもの以外に、素材・文様、袖の形、着丈、襟・縁飾り・下部のデザインにおいて、いくつかの種類がある可能性も考えられた。下部の斜線状のデザインについては、俑の例から切り替え線と考えられ、目的は不明であるが、実物の下部のパターンでの具体的な位置を提示した。

“直裾袍”の腰まわり寸法の検討においては、着装から70cm(または70cm以下)という非常に細い腰になることが判明した。これは“曲裾袍”で検討した寸法と一致しており、当時はこのように細い腰が実在したことが考えられる。このことから本墓の俑も、実際の腰まわりを表していると考えられるが、俑ではさらに裾広がりや造形によって、当時の美意識である腰の細さを一層強調していると思われる。

“直裾袍”を着装するための腰紐は、臀部下で結ぶものと考えられ、本墓出土の2種類の袍では、衣服形態や着方、着丈が異なっても、腰紐は同じ位置で結ばれることが明らかになった。

そして“直裾袍”は、着装に影響する当時の体形や姿勢と関係したパターンの作り方がされていることが判明した。

ただし本稿では、構成・着装の参考としての俑が、果して現実のものをどこまで忠実に再現しているかという問題が残されており、実物との関係性をさらに検討する必要がある。この点については今後の課題としたい。

本稿は、国際服飾学会第25回大会(2006年6月、於学習院女子大学)における口頭発表の内容に加筆・修正したものである。

謝辞

本研究にあたり、ご指導を賜りました元奈良女子大学教授岩崎雅美先生、及びご助言とご協力を頂きました同志社女子大学教授清水久美子先生に謹んで御礼を申し上げます。

注

- 1) 第一代軟国列侯。在位は、恵帝2(前193)年～呂后2(前186)年の8年間で、長沙国丞相を兼任していた。
- 2) 湖南省博物館・中国科学院考古研究所編『長沙馬王堆一號漢墓』, 文物出版社, 1973年
- 3) 名称については、本稿では発掘報告書に従い、「袍」として“曲裾袍”および“直裾袍”を用いる。
- 4) 相川佳予子「漢代衣服史小考」, 『東方学報』47号, 京都大学人文科学研究所, 1974年, pp.191～216
相川佳予子「漢代の衣服－主として長沙発掘の染織品について－」, 『衣生活研究』4, 関西衣生活研究会, 1975年, pp.38～44
袁建平「論馬王堆一号漢墓出土綿衣」, 『湖南省博物館館刊』第1期, 『船山学刊』雜誌社編集出版, 2004年, pp.210～220
- 5) 拙稿「馬王堆一号漢墓出土『信期繡褐羅綺綿袍』の構成と着装に関する一考察」, 『国際服飾学会誌』No.30, 国際服飾学会, 2006年, pp.50～68
“曲裾袍”は、上前を巻き付けて着用する交領・右衽・筒袖のもので、綿入れと袷があり、素材には平絹・羅・錦、文様には雲気文(刺繡)や菱形文・幾何学文・畝文(製織)が見られる。
- 6) 構成・着装の考察には、原寸大の複製が最も望ましいと思われるが、本研究では、衣服全体の把握に有効的、データがとりやすいなどの理由から、1/2を採用した。1/2よりも小さく複製した場合には、その衣服が本来持っている構成の特徴が失われ、形態を変えてしまう可能性がある。
- 7) 前掲 注2) pp.67～68
- 8) 前掲 注2) p.68
- 9) 『淮南子』本經訓第八「衣無隅差之削」, 高誘注「隅, 角也, 差, 邪也, 古者質, 皆全幅為衣裳, 無有邪角, 邪角, 削殺也」

本稿の『淮南子』は、全て諸子集成本の劉文典撰『淮南鴻烈集解』(中華書局, 1989年)に拠る。

- 10) 『史記』卷十孝文本紀「上常衣緋衣, 所幸慎夫人, 令衣不得曳地, 幃帳不得文繡, 以示敦朴, 為天下先」
- 11) 前掲 注5) pp.56～57
- 12) 漢書卷四十五劓伍江息夫伝(江充)「自請願以所常被服冠見上, 上許之, 充衣紗縠禪衣…」
- 13) 棺室から出土(1点)した。前掲 注2) pp.39～45
- 14) 計162点出土。着衣戴冠男俑, 着衣侍女俑, 着衣歌舞俑, 彩繪立俑, 彩繪樂俑, 辟邪の木俑, 小木俑がある。前掲 注2) pp.97～101
- 15) 陝西省臨潼県新豊驪山出土陶俑, 湖北省江陵鳳凰山167・168号漢墓出土彩繪木俑, 江蘇省徐州銅山漢墓出土陶俑, 山東省嘉祥東漢墓出土陶俑など。
- 16) 前掲 注5) p.55
- 17) 1.5mというのは、“曲裾袍”の複製の袍に必要な長さを検討した際、2回まわし余裕を持たせて前で結ぶとして計算した長さである。“曲裾袍”も腰紐の実物は出土していない。
- 18) 前掲 注2) p.97
- 19) 同上
- 20) 同上
- 21) 『漢書』卷五景帝紀「錦繡纂組, 害女紅者也…女紅害則寒之原也」
- 22) 『淮南子』主術訓第九「百姓短褐不完, 而宮室衣錦繡, 人主愈茲無用之功, 百姓黎民, 顛頽於天下」
- 23) 『淮南子』齊俗訓第十一「有詭文繁繡, 弱緡羅純, 必有菅屨跣踣, 短褐不完者」
- 24) 前掲 注5) p.56
- 25) 『淮南子』繆稱訓第十「錦繡登廟, 貴文也…故筦子文錦也, 雖醜登廟, 子産練染也, 美而不尊」
- 26) 101点出土(162点中)。前掲 注2) pp.97～100
- 27) 張衡「思玄賦」(『文選』卷十五)「舒妙婧之織腰兮」, 李善注「妙婧細腰貌」
- 28) 前掲 注5) pp.55～56
- 29) 前掲 注5) p.55

(2010年11月30日受理)